

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University merge to Osaka Metropolitan University

<b>Title</b>	フィクションと歴史：ウィリアム・マーシャルを例として
<b>Author</b>	林, 愛沙
<b>Citation</b>	表現文化. 3 巻, p.73-84.
<b>Issue Date</b>	2008-03
<b>ISSN</b>	
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学文学研究科表現文化学教室
<b>Description</b>	

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

## フィクションと歴史 — ウィリアム・マーシャルを例として —

林 愛沙

### 1. はじめに

1519年、征服者フェルナンド・コルテスに率いられたスペイン人の兵士達は、アステカ王国の首都テノチティラン（現メキシコシティ）に向かっていた。彼らは次々と現れる壮大な建物や湖を横切る堤道などに呆然とし、当時流行していた騎士道小説『アマデイスの物語』に登場する夢幻の世界を見る思いであったと言う<sup>1</sup>。だが彼らは、架空の物語の内容が現実に存在したことに驚いたのではなかった。新世界に向かったスペイン人の少なからぬ部分は、当時大流行していた荒唐無稽な騎士道小説をフィクションではなく、実話だと信じていたのである。「黄金郷」や「アマソンの国」を追い求める情熱が、彼らを未知の世界へと向かわせたのだ<sup>2</sup>。

このエピソードは、基本的に事実の積み重ねによって構成されると考えられている「歴史」と、人間の想像力の所産である「物語」との相互作用について興味深い事例を提供している。しかし歴史が形成される過程において、人間の行為それ自体と、そもそもその行為を引き起こすことになった思想や空想との間に明確な境界線を引くことは難しい。

では16世紀のスペイン人を熱狂させ、彼らをトルコ人との戦いや新世界の征服へと向かわせる一端となった騎士道物語は、どのようにして生まれ、定着していったのだろうか。この小論では、かつて「騎士の中の騎士」と謳われたウィリアム・マーシャル（英：William Marshal、仏：Guillaume le Maréchal）に焦点を当て、騎士道物語におけるフィクション

と歴史との関わりについて考察してみたい。

## 2. ウィリアム・マーシャルの事績

ウィリアム・マーシャルは騎士道の形成者の一人と言われている。彼は12世紀半ばのイングランドに生まれたが、マーシャル家の後継者としては事実上四番目の立場にあり、相続権を手にする可能性は低かった。幼少期にフランスのノルマンディー（ただし当時この地方はイングランドと共にノルマンディー公の支配下にあったことに注意）に渡ったウィリアムは、習慣に倣って父ジョンに縁のあるタンカーヴィルのウィリアム（William of Tancarville）の下で八年間仕え、二十歳過ぎの頃に騎士に叙任された。しかし騎士に叙任されても、将来の確約が得られるわけではない。庶子であるウィリアムは自ら生計を立てる算段を考えなければならなかった。

彼に転機が訪れたのは、12世紀の中世ルネッサンスの立役者として有名な王妃エレーノール（Eleanor of Aquitaine：1122～1204、フランス語ではアリエノール・ダキテーヌ）の目に留まったときである。フランス南西部を占める広大なアキテーヌ公国の相続者としてフランス王ルイ7世に嫁したエレーノールは、その後アンジュー公とイングランド王を兼ねるヘンリー2世と再婚し、イングランド王妃となっていた。当時エレーノールは四十代後半であったが、アキテーヌの居城ポワティエの近くで近隣の貴族に襲撃された際、身を挺して彼女を守ったのが二十四歳の若き騎士ウィリアムだった<sup>3</sup>。これをきっかけに彼は、エレーノールとヘンリー2世との間の嗣子である、ヘンリー王子（Henry the Young King）<sup>4</sup>の側近として抜擢されることとなる。これはウィリアムが一介の遍歴騎士に過ぎなかったことから考えると、異例の大出世であった。

ヘンリー王子の死後、十字軍に参加したウィリアムは、帰還するとヘンリー2世に仕えた。彼は国王からの絶大な信頼を受け、宮廷内において飛

躍的な出世を遂げた。しかしそれはあくまで役職上のことであり、大きな富を手にしていただけではなかった。(このときウィリアムはヘンリー2世からランカシャーのカートメルを領地として与えられ、封土を得ることとなるが、これは1年に32リブラの収入しか得られない非常にささやかなものであった<sup>5</sup>。)ウィリアムが実際的な富を手にしたのは、リチャード・デ・クレア (Richard de Clare)<sup>6</sup>の娘であるイザベルとの結婚によってである。これによりイングランドきっての有力貴族となることができたウィリアムは、その後伯爵の地位を得ている。

ヘンリー2世の死後、彼の三男であったリチャード1世(獅子王リチャード)、さらにリチャード1世の死後は末弟のジョン王と、歴代のイングランド王に仕えたウィリアムは、ジョン王の死後、まだ九歳だったヘンリー3世が即位すると、諸侯の推薦を受けて摂政として政治支配の実権を握った。1216年に勃発したマグナ・カルタを巡る内乱において、マグナ・カルタを二度にわたり改訂公布するなどして内乱を收拾し、事態を回復することができたのも、ウィリアムの功績によるところが大きい<sup>7</sup>。1219年、ウィリアムは息子と忠臣に見守られながら亡くなっているが、このとき少なくともウィリアムは七十歳を過ぎており、当時としてはこれは例外的な長寿であった。

### 3. 『ウィリアム・マーシャル伝』と騎士道概念形成との関係

ウィリアムの死後、彼の長男は吟遊詩人(トルヴェール: Trouvère)<sup>8</sup>に『ウィリアム・マーシャル伝』(Histoire de Guillaume le Maréchal)と称される1万9千行に及ぶ長詩を書かせた。これは今日、当時の代表的な騎士としてのウィリアム・マーシャルを知る大きな手がかりとなっているだけでなく、この伝記そのものが後世の騎士道概念の成立に少なからぬ影響を及ぼしたと考えられる。

ここで興味深いのは、『ウィリアム・マーシャル伝』それ自体には荒唐無稽なフィクションの要素がほとんどないと認められているにもかかわらず<sup>9</sup>、そこには後の騎士道ロマンスと重なり合うモチーフが少なくないことである。『ウィリアム・マーシャル伝』の作者は、この伝記を書くにあたって、あくまでも正確であることに非常にこだわりを見せており<sup>10</sup>、作成に用いられた一次資料はウィリアムの従騎士だったジョン・ドレルリー(John d' Erley)による証言に依拠している。

しかしその一方で、トーナメント(馬上試合)あるいは実際の戦闘で手柄を立てるために各所を渡り歩いていた若い騎士が、その武勲および礼節に注目した貴婦人の手によって引き立てられ、さらに聖地への巡礼(十字軍遠征)を経た後、忠実かつ聡明な王の相談役となって人生を全うする、というウィリアム・マーシャルがたどったプロセスそのものが、当時の騎士の理想像だったのである。モーリス・キーンは、ウィリアム・マーシャルの伝記作家が忠誠、武勇、勇敢さ、クルトワジー(礼節)を強調していることを指して、これらの騎士道的徳目がフィクションのみならず、実際の騎士の生活とも密接に結びついていると考察している<sup>11</sup>。

『ウィリアム・マーシャル伝』には戦場と同じくらい宮廷の場面が多く登場するが、ウィリアムの伝記作家は、ウィリアムが「歌やダンス、さらにはトーナメントでの活躍により、貴婦人たちの熱い眼差しに応えた」<sup>12</sup>として、ウィリアムが貴婦人を喜ばせる術を心得ていたことを強調している。騎士はなぜ貴婦人を喜ばせることに腐心しなければならなかったのか。それは、貴婦人に気に入られることが自分の出世に繋がることを知っていたからである。すでに述べたように、ウィリアムの出世への第一歩は王妃エレアノールに注目されたことであった。彼女はルイ7世およびヘンリー2世との二度の結婚により、今日十二世紀ルネッサンスと呼ばれる南フランスの宮廷文化を北フランスとイングランドへもたらすのに大きく貢献した。エレアノールは宮廷詩人や吟遊詩人を手厚く保護し、ウィリアムが引き立てられた時期にはアキテーヌ地方のポワティエの居城を中心とした宮

延文化が華開いていた。彼女が前夫ルイ7世との間にもうけた長女マリー・ド・シャンパーニュ（シャンパーニュ伯夫人）もポワティエにいる母のもとに足繁く通い、後に古代ローマの詩人オヴィディウスの『愛の技法』に倣って、自らのお抱え司祭アンドレ・ル・シャプランに『正しき恋愛技法論』と題された宮廷恋愛の指南書を書かせることになる<sup>13</sup>。

ウィリアムがエレアノールから受けた寵愛は、単なる武勇やトーナメントの活躍によって得られたものではない。ペインターが指摘しているように<sup>14</sup>、ウィリアムの忠実な奉公はもちろんのこと、彼の歌やダンスは大いに彼女を喜ばせたに違いない。中世における宮廷風恋愛の第一人者であり、また有力者でもあった彼女に気に入られることはウィリアムにとって大きな後ろ盾となり、後にヘンリー王子の指南役という大役を任されるに到った。クルトワジーが彼の出世の第一歩に大きく貢献したのである。クルトワジーが騎士の出世を助ける、というウィリアムの例はその後の騎士道小説に反映され、彼のような出世を夢見る徒弟期間中の若者や身分の低い騎士たちの願望もまたフィクションの中に描き出された。

さらにキーンは12世紀以降、それまで専ら修道院の僧侶によって書かれていた年代記に代わって、『ウィリアム・マーシャル伝』のようなさまざまな家伝（family histories）が書かれるようになったことを指摘する<sup>15</sup>。こうした家伝の特徴は、そこに描かれる人物が必ずしも王家の血を引いているとは限らず、むしろその騎士としての行いの高さによって富と名声を得たことが強調されている点にある。しかし同時にそれらは、『ロランの歌』のような武勲詩やアーサー王伝説を思わせる雰囲気を持っている。

ここで注意しなければならないのは、歴史上の真実に対する中世人の見解である。例えば中世において、「私は真実を語っている」というのは、文学作品における常套句であった。しかしこの時代における「真実に対するこだわり」というのは、「史実に忠実であるか」ということではなく、いわば「もっともらしさ」であった。年代記作家たちは執筆にあたり、資料として集めた証言を批判的に見たり、非現実的な要素を取り除いたりす

るようなことはしていない。さらに、作者はあくまで貴族（自分の主人）の立場に立ち、貴族的価値観から歴史を記述するので、『アーサー王伝説』に基づく英雄のあるべき姿からかけ離れたものは意図的に描かなかったり、多少の演出を加えたりすることも当然あった<sup>16</sup>。こうした傾向は『ウィリアム・マーシャル伝』においてももちろん見られることである。アーサー王伝説がジェフリー・オブ・モンマス（Geoffrey of Monmouth）の『ブリタニア王列伝』（*Historia Regum Britanniae*）によって史実として歴史化され、さらに今度はヴァース（Wace）による翻案『ブリュ物語』（*Roman de Brut*）によってロマンス化されたことに見られるように、歴史とフィクションの間を行ったり来たりしているこの時代において、作者も読者も歴史と伝説（フィクション）を厳密に区別することはなかったのである。

#### 4. 『ウィリアム・マーシャル伝』に含まれるロマンス的要素

このように『ウィリアム・マーシャル伝』は、歴史的な事実のみを叙述したものではないが、もちろんだからと言って純粋な虚構でもない。以下では、この伝記に認められるロマンス的要素をより具体的に見ておきたい。今日我々がイメージする西洋的な「恋愛」が生まれたのは12世紀のことである。しかし少なくとも12世紀にはその原型となるものが存在していた。それ以前は、男女間の対等な恋愛関係などは存在せず、女性は主として「武勲詩」に登場するような女性像か、あるいは中世のキリスト教的見地から見た女性像の二つに分けられた。武勲詩に登場する女性は、結婚の道具といったような非常に粗略な描かれ方をされており、さらにキリスト教世界においてはイブの後裔である女性は、諸悪の根源として女性蔑視の考え方がはびこっていた<sup>17</sup>。ところが12世紀に入ると男性から女性への敬意が語られるようになり、それが美徳とさえされるようになる。ただしここで言う女性とは身分の高い女性のことを意味し、さらに言えば既婚の

女性に限られていた。

なぜ既婚女性でなければならないかという問題について、新倉俊一は「結婚という制度的な制約があって、なおかつ主体的にそれを乗り越える愛が生じなければならない、そういう障害を越えてはじめて愛が確かなものになる、という考え方に基づいている」<sup>18</sup>と述べている。しかし一番の理由はもっと実際的なところにあると考えることもできる。当時、城を所有する君主は、近隣の敵と戦う際の戦力とするべく騎士となった若者たちを傭兵として雇い、自らの城に住ませた。そうした中で城主の夫人は若い騎士たちに囲まれながら宮廷文化を営んでいた<sup>19</sup>。彼女たちの宮廷には多くのトルバドゥール（Troubadours）がいた。貴婦人とその夫である君主に仕える若い騎士との関わりがトルバドゥールの想像力をかきたてたことは言うまでもない。

ジョルジュ・デュビーは、夜になれば貴婦人と若い騎士たちは区切りによってしか遮られていない状況の中、宮廷では「誰が貴婦人の愛を勝ち取るか」というような遊びが行われていたとして、姦通がいかに起こりやすい状況であったかを述べている。また、「夫婦間には真の愛が占める余地があるか否か」という問題に対して、明確に「否」と答えたマリー・ド・シャンパーニュ<sup>20</sup>のような貴婦人たちが、トルバドゥールに姦通を題材にした物語を要望することもあった。このように、身分の高い既婚女性と若い騎士との恋愛は騎士道小説における代表的なモチーフとなるのであるが、とは言え、もちろんそのような問題が現実が発生し、発覚した場合、容認されることはありえない。

ウィリアムが三十五歳頃のと看、ヘンリー王子の宮廷でウィリアムとヘンリー王子の妻マーガレット（Margaret）との姦通の噂が流れた。もっともこの件についてはウィリアムの頌徳文に書かれている通り、「ウィリアムの戦友で、宮廷の有力貴族であったアダン・ド・イクブフ（Adam de Iquebeuf）らが、当時宮廷での出世頭であったウィリアムを妬んで、その名誉の失墜を図ったのではないか」<sup>21</sup>という見解が有力である。いずれに

せよ、その噂は宮廷で知らぬ者はいないまでに広がり、最終的に王が寵愛している小姓の少年によってヘンリー王子の耳に届いてしまう。沈黙を守りながら非難に耐え、宮廷に留まっていたウィリアムは、噂を耳にしたヘンリー王子があからさまにウィリアムを遠ざけるようになると、トーナメントで武功をたてるなどしてその信頼を回復しようと努めるのだが、それでもヘンリー王子の寵愛を取り戻すことはできない。

その後、ヘンリー2世がカーン(Caen)で大規模な会議を催すことを知ったウィリアムは、疑いを晴らすべく「戦いという神の判断による厳しい試練を経るべき場所」<sup>22</sup> カーンへと向かう。そこで彼は「噂を広めた3人(おそらくはアダン・ド・イクブフも含まれるであろう)と闘い、全員を打ち負かすことができなければ、絞首刑になっても構わない」と述べ、自らの無実を証明しようとするが、ヘンリー王子はこれを却下する。これによりウィリアムはプランタジネット朝の国土を後にする。(ちなみに、その2、3週間後にはヘンリー王子自らの要請により宮廷に復帰している。)

以上が、事件の大筋であるが、これは〈トリスタンとイゾルデ〉の物語に非常に似ている。〈トリスタンとイゾルデ〉の悲恋物語は『アーサー王伝説』の中でも代表的なエピソードの一つとなっているが、これはそもそも12世紀の中頃(1150年頃)のフランスでそれまで散在していた口承や伝承をまとめられて成立したと考えられている。この原本は現存していないが、そこから派生した写本から我々は〈トリスタンとイゾルデ〉の物語を知ることができる。〈トリスタンとイゾルデ〉については多くの研究がなされているので、ここではウィリアムとの共通項を紹介するに留めたい。ウィリアムとトリスタンとの共通項は、主として二人の姦通が王へ露見するくだりの前後に多く見られる。

独身の伯父マルク王のために敵国アイルランドから美しき王女イゾルデを連れて帰ってくる途中、トリスタンとイゾルデは誤って媚薬を飲み、恋に落ちる。帰国後、イゾルデはマルク王の妃となり、二人は秘かに逢瀬を重ねるが、一方で宮廷でのトリスタンに対する評価が高まっていった。そ

んな中、トリスタンが王妃との逢瀬を目撃したトリスタンの友人でありマルク王の第一の内膳頭であるマリョドー<sup>23</sup>は、密かに王妃を慕っていたために激しい嫉妬にかられ、トリスタンとイゾルデの姦通の噂が宮廷に出回っているとマルク王に密告する。トリスタンはマルク王の疑念を晴らすと、決闘による決着を申し出るが、誰一人挑戦を受け入れない。マルク王は疑念を晴らすべくロンドンで会議を開き、ここで「熱鉄の裁き」により無実が証明されたイゾルデは再びマルク王に愛される。以下、物語はまだ続くのだが、ここでは省略する。

ジョルジュ・デュビーは、この事件について触れるとき、しばしばウィリアムをトリスタンに、ヘンリー王子をマルク王に、マーガレットをその妻イゾルデになぞらえて描写しているが、それ以外にもアダン・ド・イクブフはトリスタンの友人であるマルク王の内膳頭マリョドーに、国王に密告した小姓は小人メロート（ここには登場しなかったが、マリョドーの命を受けて姦通の証拠を握るために奔走し、国王に密告する役目も果たしている。）にという風に、〈トリスタンとイゾルデ〉の登場人物に置き換えることができる。宮廷での評価が高まる中、友人の嫉みによって王妃との姦通の噂が宮廷に出回り、決闘による決着を申し出るものの却下され、最終的に会議で決着がつけられる、という流れは完全に一致している。

しかし、会議で出された結論は反対である。トリスタンは、イゾルデが「熱鉄の裁き」で火傷を負わなかったことで無実が証明され、国王の寵愛を取り戻すが、ウィリアムはこの会議の後、後に復帰するとはいえ一度はプランタジネット朝を去ることになる。これは『ウィリアム・マーシャル伝』において〈イゾルデ〉の存在が欠如していることと関係がある。そもそも、『ウィリアム・マーシャル伝』には「マーガレット」の名前すら登場せず、カーンにおける会議の場面でも「熱鉄の裁き」はおろか、彼女が出席していたのかどうかすら不明である<sup>24</sup>。〈イゾルデ〉の欠如は、『ウィリアム・マーシャル伝』が宮廷風騎士物語ではなく、あくまで英雄の伝記として書かれていることに起因する。しかし、「伝記」という枠の中でなお、ウィリアム・

マーシャルをトリスタンと重ね合わせたことから、フィクションを利用してウィリアムを英雄化しようとする伝記作家の意図がうかがえる。

## 5. 終わりに

中世ロマンスの作者たちは、当時非常に史実性を持つと考えられていたアーサー王の時代に注目した。そこから彼らは、理想の騎士のモデルを開拓し、クルトワジーという宮廷風の文明化された行動を強調したのである。ただしその過程において、ウィリアム・マーシャルのような実在の騎士の事績や、王妃エレアノールを中心に発展した宮廷恋愛の技法が、フィクションを作り上げる上で少なからぬ貢献をしている。むしろ12世紀フランスを中心とした、地位や財産を持たない若い騎士たちの行動様式と、宮廷風恋愛やクルトワジーといった騎士道観念の形成は、相互に影響を受けながら発展していったと考えられる。しかし「中世の秋」としての15世紀になると、トーナメントの演出としてアーサー王物語風の衣装に身を包んだり、ロマンスを模した祝宴や儀式を行ったりするようになり、現実の中で虚構を再模倣しようとする動きが見られるようになる。その究極のパロディーは、言うまでもなくセルバンテスの『ドン・キホーテ』である。しかし冒頭のアステカ王国征服時のスペイン人兵士の感慨にも見られるように、ルネッサンス期においても騎士道物語は一部でなお強い影響力を持っていたのである。この点において、我々は『ドン・キホーテ』を基準として、騎士道物語の全てを無価値なものとして退けたり、単なる空想の産物と考えたりするべきではない。それは「ドン・キホーテ史観」とも言うべき、近代的な価値観に捉われすぎた視点である。むしろ現実の歴史の発展において、その原動力の一部となってきたのは、中世からルネッサンスを経て、恐らくは今日にまで及んでいる西洋の騎士道物語の想像力かもしれないのである。

【注】

- 1 増田義郎『古代アステカ王国 征服された黄金の国』中央公論社、1963年、中公新書、pp.118-119.
- 2 増田前掲書、pp.8-9.
- 3 石井美樹子『王妃エレアノール 十二世紀ルネッサンスの華』朝日新聞社、1994、朝日選書 494、pp.312-313.
- 4 ヘンリー2世とアキテーヌのエレナーの次男で、兄ウィリアムが三歳で夭折した後、父王からイングランド、ノルマンディー、アンジューの相続人に予定され、1170年父王在位中に戴冠された。(松村赳・富田虎男『英米史辞典』、研究社、2000年、327ページ。)
- 5 32リブラは当時では馬1頭に換算される。(Georges Duby, *William Marshall, the Flower of Chivalry*, (Pantheon: New York, 1985), p.119.)
- 6 アイルランドの支配者。本来イングランドの貴族であったが、アイルランドでの内紛鎮圧に貢献し、アイルランド王位を継承した。リチャードの権力強化を恐れたヘンリー2世が来島した際にはヘンリー2世にレンスターを献上し、王位を認められている。(松村・富田前掲書、147-148ページ。)
- 7 青山吉信『世界歴史体系 イギリス史1 一先史～中世一』、山川出版社、1991年、261ページ。
- 8 南フランス、特に後のプロヴァンスや北イタリアで11世紀から13世紀にかけて活躍した詩人やミンストレルをトルバドゥール (Troubadours) と言い、特に12世紀から14世紀にかけての北フランスのトルバドゥールをトルヴェールと言う。(グラント・オーデン『新版・西洋騎士道事典』、堀越孝一訳、原書房、2002年、264-265ページ。)
- 9 Duby, op.cit., p.36.
- 10 Duby, op.cit., p.36.

- 11 Maurice Keen, *Chivalry*, (Yale University Press: New Haven And London, 1984),p.21.
- 12 シドニー・ペインター『フランス騎士道: 中世フランスにおける騎士道理念の慣行』、氏家哲夫訳、松柏社、2001年、24-126ページ。
- 13 石井前掲書、pp.299-310.
- 14 Sidney Painter, *William Marshal, Knight-Errant, Baron, and Regent of England*, (Johns Hopkins Press: Baltimore, 1933), p.29.
- 15 Keen, op.cit.,p.32.
- 16 原野昇『フランス中世文学を学ぶ人のために』、世界思想社、2007年、59ページ。
- 17 新倉俊一『中世を旅する 奇蹟と愛と死と』、白水社、1999年、38-40ページ。
- 18 新倉俊一「愛、この十二世紀の発明」、堀米庸三編著『西欧精神の探求—革新の十二世紀』、日本放送出版協会、1976年、193ページ。
- 19 水野尚『恋愛の誕生 12世紀フランス文学散歩 学術選書015』、京都大学学術出版会、2006年、141ページ。
- 20 原野前掲書、55ページ。
- 21 Painter, op.cit., pp.46-47.
- 22 Duby, op.cit., p.51.
- 23 プルターニュの名前。トリスタンの第一の敵役がこの名前になっているのはトマ系の作品だけで、それ以前の物語ではやはりプルターニュの名前から変形したアンドレという名前になっている。(ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク『トリスタンとイゾルデ』、石川敬三訳、1977年、郁文堂、230ページ。)
- 24 歴史的には、マーガレットは事件の2、3ヶ月後に事実上離縁され、兄弟によって今度はハンガリーに嫁がされている。(Duby, op.cit., p.50.)